

時代を視る目をどう築くか

日本文化学科長 村 松 晋

今から30年前、1989年は、元号が「平成」に改められた年ですが、それ以外にも注目すべき変化が国の内外で起こった一年でした。たとえばこの年夏の参議院選挙で、土井たか子を委員長とする日本社会党は、自由民主党に勝利、参院には与野党の逆転現象がもたらされました。海外に目を向ければ、中国・天安門での学生蜂起があり、東西冷戦の象徴「ベルリンの壁」が突き崩されました。いわゆる東欧革命が起きたのも、同じ1989年のことでした。

「バブル経済」と絡め、ともすれば浅薄に、また内向きに語られがちな「1989年＝平成元年」ですが、この年は抑圧的な社会からの解放を求めて、名もなき人々が世界規模で立ち上がった年でもあることを忘れてはならないと思います。

一方、「変化の年・1989年」は、「変わらないもの」が問い質された年でもありました。実はこの年、20世紀を彩った人々が、そろって生誕100年を迎えました。近代日本思想史に独自の足跡を遺した、倫理学者の和辻哲郎、政治哲学者の南原繁、法哲学者の三谷隆正らがそれにあたります。世界に視野を拡げれば、ナチスドイツを率いたアドルフ・ヒトラー、また20世紀最大の哲学者とも言われるマルティン・ハイデッガーの名が挙げられます。あの喜劇俳優・チャップリンも、この年生誕100年を迎えた一人でした。

そのような状況下、精神の深みから時代を把握しようとする人々は、上記の面々が凝視した問題群とかかわらせて「1989年＝現代」を問いました。いわく、私たちは彼らが直面した時代の課題を、既に克服したと言い切れるのだろうか、私たちは当時と「変わらないもの」に、依然、囚われてはいないだろうか、と。

以来30年を閲した現在、私たちはあらためて、1989年の世界に漲っていた、自由を求める心や民主化への期待に思いを馳せ、自他を取り巻く社会のありようを見直す必要があるように思います。それと共に、私たちは30年前に試みられたと同様に、自分たちの「ものの見方・考え方」を根底で規定する「変

わらないもの」は何かを問い、真の変革に歩みを進めることが求められると
考えます。

「“新時代”の到来」が喧伝されるであろう2019年、皆さんには表層的な
「新しさ」に惑わされることなく、時代を視る深く確かな目を築いてほしい
と願っています。